2024 年 10 月 26 日 BM 子どもネット研究会 セッション 3 発表要旨

シンハラ語継承語教育と道徳教育をもとに国際人材の育成を目指した教室
—保護者と子ども達へのインタビューから見えてくること—

S. M. D. T. ランブクピティヤ（久留米大学）

薮田（2024）や Cummins・中島（2011）によると、日本では、外国にルーツを持つ児童生徒の日本語教育に力を入れつつあるが、彼らの継承語教育はそれほど重要とされていない。しかし、多様な文化的言語的背景を持つ児童生徒が、自分に自信を持ち、自己可能性を発揮するには、継承語も重要な役割を果たしていると考えられる。そこで本稿では、シンハラ語の継承語教育と仏教に基づく道徳教育を行っている教室を対象に、その教室に通う子どもたちと彼らの親がどのような目的で教室に通っているのかを探ることにした。

対象とした教室は、2019 年から月に 1 回程度の回数で、現在では福岡県太宰府市に開設されているスリランカの寺院、九州ランカ・マハー・ヴィハーラヤを中心に行われている「九州ランカ・マハー・ヴィハーラ・ダハン・パーサラ」である。調査では、この教室に通う子ども達 9 名（保育園・幼稚園児 2 名、小学生 5 名、中学生 2 名）と彼らの保護者 7 名（男性 2 名、女性 5 名〈30 代～50 代〉）を対象に、ズームやメッセンジャーによるインタビューを行った。

調査の結果、子ども達の教室に通う目的には、様々な文化に触れること、シンハラ語の学習、仏教を知ることによって自分の人生を豊かにすること、そしてスリランカの友人と交流し、その関係性を維持することがあった。さらに、日本の学校では表現できない自分らしさを表せることも子どもたちがこの教室に通う目的となっていることがわかった。一方で保護者の場合、子どもが人間性を育みつつ人間を含む全ての生き物との共生を学び、どのような社会でも自らの幸福を保ちながら生きていけるようにすることが主な目的だった。その他には、子どもがスリランカの文化と接触し、スリランカのコミュニティーと繋がることも目的としていたが、子どものシンハラ語学習についての言及はほとんどされなかった。このことから、シンハラ語に関して強い意欲を持っていない可能性も示唆されるが、単にスリランカや日本に留まらず、より広い世界や複雑な社会に通じる国際人としての子どもの育成を目指しているという意向や姿勢を反映しているとも考えられる。子ども達と保護者に見られる共通目的としては、この教室を通して、人間の幸福感、換言すると、ウェルビーイングを育てることが求められていることが明確になった。今後もさらなる調査を重ね、継承語教育の役割や目的について、それぞれの使用者の視点から詳細を検討していきたい。

参考文献

Cummins Jim・中島和子著（2011）『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会。
薮田直子（2024）「移民背景をもつ子どもにとっての継承語教育の重要性—オーストラリアメルボルン市における調査をもとに—」『実践学校教育研究』25・26 巻、大阪教育大学初等教育部門 pp.69-78。